

〔文化学会主催講演〕^{*}

「平和はつくれるか」

伊勢崎 賢治

— 目 次 —

1. はじめに
2. ムンバイでのIssue based Organization
3. シエラレオネ 貧困をなくせば戦争は止まるのか
4. 「概念の戦争の幕開け」
5. 武器がなくなればいいのか
6. スリランカ「完全勝利と平和構築」
7. 「セキュリタイゼーション」

編集者解説

1. はじめに

滑舌が悪いのですが、マイクが入ってますでしょうか。実は、今、音楽をやっておりますけれども、ボーカルではなくてトランペットです。趣味ではなくプロです。

今、僕が働いている所は、東京外国語大学です。日本で多分、最も古い国立大学の一つです。世界で話されている約32カ国語、違う数え方で言えば50何カ国語

ISESAKI, Kenji 東京外国語大学教授、紛争解決・平和構築研究。なお著者のプロフィールについては、末尾の「編集者解説」〈講師紹介〉を参照。

※ 本講演は、2013年8月23日（金）16時より90分の「特別講義」として学生・一般向けに行われた。本稿は、その講演内容の再現である。講演会が実現するにいたった経緯や講演会当日の様子は、末尾の「編集者解説」に詳しい。（編集者注）

を教えています。元は、戦前・戦中はスパイ養成学校だったと言われていました。語学とその語学が話されている地域の研究をいたしております。

ちょうど10年ぐらい前から、英語で言うとPCS (Peace and Conflict Studies) というすべて英語でやる大学院の講座を担当しています。平和学と少し違います。何故かという紛争をも研究対象にするからです。安全保障という言葉もかなり頻繁に使います。軍とか警察をどうやって健全なものにするか、ということが問題意識としてあります。そういう意味で少し平和学とは違うように感じます。いわゆる国際政治学的に紛争を見て、その原因を突き止めて、出来るだけそれを起こさないようにする。そういう気持ちで研究をしています。それでPeace and Conflict Studiesと言われていました。

この講座には、基本的に日本人は入れません。どちらかという紛争当事者国、もしくは紛争があったばかりの建国中の国からの研究生のためのものです。具体的に言いますと、アフガニスタンであるとか、イラクであるとか、スーダンといったようなアフリカ大陸からの研究生といった具合です。中東からの研究生が多いです。そういう人たちを日本の政府の国費留学で迎えて、日本が考える平和を、つまり戦争、核、もしくは紛争と対極にある平和を具体的にどうやって構築するか、ということをお教えるわけです。彼らは帰国後、本当に喫緊に必要な状況において、ただちにその平和構築のために働いていただくという考えの下に運営されている講座です。

僕はこれまで現場にずっとおりましたので、今日はその話をいたします。今でも現場に、つい先週までインドとパキスタンの国境のカシミールにおりまして、ずっとこの方法で平和構築に関わっております（この話も後で時間的余裕があれば少し話しますが）。そういうわけで、今も現場にはまだ関わっていますが、いわゆる国連職員とか、外交官という立場では、この10年ほど関わっておりません。昔はそういう立場でした。今は教育者、研究者という立場で関わっています。いかに研究者と教育者として東京に縛られていようとも、やはり日々、紛争当事者国の学生と接しておりますと、いろいろのことを考えさせられることがあります。行ったことのない国でも、そこから来た学生を教えることによって、その国の紛争、戦争、問題が非常に身近に感じられる場合もあります。新しいケースを知るにつれ、またそれまで抱えてきた既成概念が崩され、新しいものが生まれる。こ

の繰り返しを今も変わらずいたしております。今日のテーマの「平和はつくれるか」と関わりますが、僕自身に信念とか主義主張があるわけではありません。今日、信念に近いことを言ったとしても、ひょっとすれば明日はまた変わっているかもしれません。

それでもう一つ、この本論に入る前に言わせていただきたいことがあります。それは、日本に帰ってきてからは特に、どういうわけか僕は護憲派という風に見られているということです。それはある一つの書物を著わしたのですが、日本の国益のために僕は（憲法）9条は保持した方がよろしいという結論で結びました。それが『武装解除』という本でした。それ以来、僕は単純に護憲派というレッテルを張られまして、尊敬すべき「9条の会」、しかも全国津々浦々の9条の会にずっと呼ばれてきました。本当に、忙しかったです。ところがちょうど4年前、それがピタッと止まりました。なぜ止まったかと申しますと、朝日新聞にインタビュー記事がでかかど載ってしまったからです。それがどういうものかという「憲法9条は日本人にはもったいない」という僕の発言でした。それ以来、ピタッと来なくなったのです。「9条の会」の方がお怒りになったのかもしれない。「伊勢崎賢治」と「9条はもったいない」でインターネットを検索しますと、記事が出てきます。

その背景を説明します。いわゆるソマリアの海賊退治の名前で、日本は海上自衛隊を派遣しました。ソマリア沖には、今でも自衛隊が派遣されています。ソマリアの方から見れば日本、我々が海賊かもしれないじゃないですか。海賊と言っても、小火器、つまり小さな武器で武装しているような漁師に対して、世界が寄ってたかって、軍事力を行使して、取り締まっているのです。あの時に日本人は、派遣に反対しませんでした。特に護憲派と言われる人たちは、僕が知る限りでは何もしていません。勿論、したと言う人たちもいるでしょう。しかし、僕はびっくりしたわけです。あのソマリア沖への派遣というのは、多分、日本の戦後の歴史のなかで、海外の日本人の命を守るという名目で、武力を海外派遣した最初の例なのです。それまでは国連の決議や要請を受けて、もしくはブッシュに騙された小泉さんが、集団的自衛権の行使をして、イラクに自衛隊を派遣しました。世界益という体裁をとっていた。もっともアメリカにとっての世界益ですけれども。一応、そういう大義名分があったわけです。ソマリアの場合は日本の船が狙われ

るから、日本の自衛隊を出さなきゃいけない。日本人を守るため、日本人の財産を守るために、と。これに対して最大級の反対運動が起こらないのはどういうわけだと言って、「そんな護憲派なら無意味」と言ってからは、総スカンを食いました。

僕は護憲派から見限られた後、どういうわけかそれとは逆の方向を進み、自衛隊で、特に自衛隊（軍隊）の幹部、統合幕僚幹部学校という将来の幕僚幹部、つまり自衛隊の中のエリート中のエリートを養成する学校の講師を10年間勤めています。なぜ自衛隊が僕の話をお聴きしたいかというと、自衛隊の人は頭にきているわけです。これまで、あまりに節操がない政治判断によって、自衛隊が海外に出されて、命がけで任務をこなしたんですから。今、僕はアフガン政策においてもアメリカと日本の政治判断が、いかに誤りを犯してきたかということをお自衛隊の幹部に講義しています。ずっと年に2回ずつ、10年間教えてきました。しかし、9条が日本の国益のためになる、という考えはまだ変わっていません。勿論、明日変わる可能性もありますが。

8月15日のNHKのテレビ番組をご覧になられた方もおられると思います。久しぶりにテレビに出ました。NHKの方も少しは変わってきました。あの番組は毎年行っています。しかも8月15日のゴールデンタイムに行っています。だいたい今まででしたら、護憲派、改憲派、もしくはリベラル、保守みたいに分かれます。観客も分かれて周りを取り囲み、その真ん中に有識者がいるという構図です。4年ぐらい前に一度、あの番組に出てひどい目に会いました。一言しかしゃべらなかつたのです。正確には、有識者に対して少し発言しましたが、その他はしゃべる気にもならなかつたのです。あまりにも演出が見え見えでした。どちらもプロ市民という人を連れて来ている。右も左もプロ市民で、ギャンギャン言い合う。その中に我々がいる。もう完全に分かってしまうのです。どういう意図でつくられた番組か。それ以来、NHKには出演しないと申しました。

しかし、今回お話があって、従来の方式は止めて、護憲派とか改憲派とかの垣根を取り払い、今度は、日本の将来について、日本が考える平和があったとしたら、それをこれからどう構築していくのか、未来の平和が、今まで日本が60年間以上享受してきたこの平和と違うものになるのか、もしくは同じものになるのか、といったことを建設的に議論したいということでした。それからプロ市民も連れ

てこないということで、OKしたのです。それで出たわけですが、非常にいい経験になりました。日本のメディアも、少し考え方が変わってきているのだと、少し希望を持ち始めました。

2. ムンバイでの Issue based Organization

話を進めます。「平和はつくれるか」というお題は、非常にフラジャイル（脆弱）な問題設定です。つくる平和って、誰の？っていう。今日お話するのは、僕の経験してきた正直な葛藤の話をします。結果、地球上のすべての人々を平和にするのは無理かも、という結論になるかもしれません。

これは分からないでしょうね。これはインドです（写真1）。インドのムンバイ。当時はボンベイと言っていました。東京と同じくらい人口1千万。今は2千万になっております。ご存知のようにインドは今、経済大国で、同じ民主主義側にいますから、我々にとっては中国に対抗する救いの神です。インドという国は非常に不可解な国で、元祖非暴力のマハトマ・ガンディーがいたのに、今は、核武装をしている。この写真はダラービというアジア最大のスラムです。東京ではホームレスの人たちは、いわゆるマイノリティーです。数えるほどしかいません。しかしこの都市は「スラム

写真1

バイ」とあだ名が付く程に、路上生活者もしくはスラムの住人、不法占拠者の方が多いのです。人口の6割、7割はいわゆる不法占拠者です。税金も納めてない。スラムがとにかく、ごまんとありますが、その中で一番でかいのがダラービと呼ばれて、人口が当時60万人が一つのスラムです。



アカデミー賞をとった『スラムドッグ・ミリオネア』のロケがここで行われ、

近年非常に有名になりました。ここに僕が行ったのが1984年頃、ちょうどインディラ・ガンディー首相が暗殺された時期です。このころ、僕はソーシャル・ワークを学ぶ一人の学生で22歳ぐらいでした。ここで何をしたかという、これです(写真2)。スラムというのは不法占拠ですから、いつでも、政府当局から強制撤去をされます。突然ブルドーザーが警官隊と共にやってきて、強制撤去されるのです。それに対抗する運動を組織しようと思いました。部落解放運動というのが日本でもあります。あれと同じ、あれよりもっと凄いやつと考えてください。本当に政府当局、警察当局と死闘を繰り返していました。住民を団結させるのです。活動原理は、カソリックの「解放の神学」の流れを汲んでいます。抑圧された人たちが覚醒して、権利意識をもって立ち上がって、一つの政治の力となる。それで世の中を底辺から変えていくのです。でもこれは、言うは易しい。何故かという、底辺の人たちは団結しないのです。団結したら凄いやつになるのですけれど、しないのです。何故しないかという、まず貧しい。団結している暇がない。だいたい肉体労働者です

写真2

から。もう一つは主義主張が合わないのです。特にインドみたいな多民族国家では宗教が違う。カースト制度がある。敵対するヒンズー教とイスラム教がある。そういう差異を利用する政治により、貧しい人々ほど分断されるのです。



皆さんは、それらに対立するものだと思っているでしょう。その対立を作り出すのが政治家なのです。例えば、インドで日本の右翼に当たるのは、ヒンズー至上主義者です。インドはパキスタンとずっと建国以来、戦争をしています。パキスタンはイスラム教徒です。そしてインド国内にもイスラム教徒がいるわけです。イスラム教徒は隣国パキスタンの手下である、ということにより右翼政治家は支持を集めます。日本の政治家と全く同じです。政治家というのは、そういうもの

です。政治家同士は、喧嘩をしません。ただ言っているだけです。しかし、煽られて殺し合うのは、スラムに住むような貧しい人たちなのです。いろいろなイデオロギーで分断されて、凝縮されて住んでいますが、彼らは団結しないのです。逆に殺し合います。

『スラムドッグ・ミリオネア』という映画を観ますと、それが一番よく描かれています。インドではマイノリティーに当たる、いじめられている立場にあるイスラム教徒の家庭の貧しい兄弟の物語です。映画の冒頭、その兄弟のお母さんがヒンズー教徒の暴徒に殺されるシーンから始まります。この映画は本当によくできた映画です。一度観てください。

僕はインドのNGOに属していましたが、僕らの活動の基本になる考え方に、「イシュー・ベースド・オーガナイゼーション」(Issue based Organization)という言葉があります。「イシュー」ですから「フェイス (faith) ・ベースド・オーガナイゼーション」ではない。どんな宗教も友愛とかを説くわけです。でもこういうところに「みんなで仲良くしようよ」と言えば、「お前、どこの宗教のまわし者だ」と言われる。それで住民を団結させるときに一番大切なのは、愛とか友達とか友愛とか言ってはならない。だから言いません。その代わりに共通の社会問題「イシュー」と顕在化し、認識させる。

例えば強制撤去という問題は、イスラム教徒であろうが、ヒンズー教徒であろうが共通の問題なのです。トイレがない、衛生状態が悪い、これはどのような宗教に属していても同じ問題であるわけです。その問題を解決するためだけに、短期間だけでもいいから一緒にやろうということなのです。「それが解決されたら、また殺し合っていないよ」くらいの気持ちで臨むわけです。そうすると団結してくれます。その結果、この人口60万人のスラムの約40万人を一つの住民組織に結束させることができました。これは多分、当時、スラムの住民組織で一番大きい組織でした。その組織はまだ現存します。

こうしたスラムの仕事は夜の仕事です。彼らが仕事から帰ってきた後に、夜中にやるわけです。そして、デモを計画します。デモは、ヒンズー語で「モルチャー」と言います。決して小さいデモではありません。僕らが動員した最も大きなものは20万人です。それを何回も仕掛けます。それで「住民は怒ってるんだぞ」と主張するわけです。警察は、どこも同じですから、当然、ちよっかいを出してきま

す。暴力沙汰を起こさせて逮捕するのですが、こういう様子を、僕は黒子のように離れたところで見ているのです。そうやって観察して、デモの後にリーダーたちと反省会を行う。2回目はそうした煽動に乗らないようになる。そして最後には、市当局と直接談判できるようになります。そしていろんな権利を引き出して行きます。

平和を構築することと社会運動の解決とは密接な関係があります。何故かという平和を乱すものは、世の中の不満です。それも個人の能力とは全く関係ない、どこの生まれか、どんな宗教の生れか、どのカーストの生まれかによって、後々の事柄が決まってしまうようなことに対して人間は不満を持ちます。それが紛争の種になる。ですから、構造的な暴力を解決すれば、紛争が遁滅できるというのは、一つの真理だと思います。しかし、それほど簡単なものではありません。どうということかという、さきほどの（大峯君の）説明にもありましたように、僕は4年半、このスラムで活動して、遂にはインド当局から拘束され、国外退去となるのです。それは何故かという、政府から見れば、外国人がこうしたことをするわけですから、これは反政府運動に当たるのです。つまり政権転覆のようなことです。実はCIAも同じようなことをやります。いったい何が違うのか。僕の給料がどこから出たのかを考えます。僕の給料は「解放の神学」（イシュー・ベースド・オーガニゼーション）をベースとしていますから、ラテン・アメリカの方から出ていたのです。多分、CIAのお金は入ってないと思います。つまり外国人がそうしたことをすれば、政府から目を付けられます。

構造的な暴力に対する抵抗運動をつくるのは、今は簡単です。CIAの主だった活動に批判を浴びてから、アメリカは民主化運動を支援するようになりました。つまり強権的な政権、「悪者」だった政権に対して、アメリカは、民主化という口実でもって、反政府組織にお金を与えるようなことを行ってきました。

そして今では、また違った感じの民主化運動が起こっています。それが「アラブの春」です。民主化運動に外部のものが資金を梃子入れしなくても、ただSNSとかface bookで若者が繋がるという新しい現象が生まれつつあります。それが今、構造的な暴力を底辺から変えるという一つの姿です。果たして、それは良いことなのでしょうか。分かりません。つまり僕が行ってきたことと、CIAがしているようなことと、いったい何が違うのか。結果的に僕はいいことをしてきたと

思いますけれども、それは僕の思いであって、インド政府はそうは思っていなかったのです。だから僕を国外退去にした。それ故、これは非常に難しい問題です。今はこういう民主化運動もボーダーレスになったことで、果たして民主運動を外からの力で行うことや、もしくは外からの支援で支えるというのはどういうことなのか。翻って、完全にドメスティックな自己完結した民主運動が今の世の中であり得るのか。難しい問題です。

次はこれです（写真3）。チェ・ゲバラです。暴力革命の指導者です。虐げられた者たちが立ち上がる場合、ガンディーさんのように非暴力非服従でやる方法と、逆に銃を取る方法とがあります。ゲバラ自身も人を殺しているでしょう。こういう行為が赦されるか。国

写真3



際法的には、目下のところ許されています。しかし、国際法は非常に脆弱な法体系で、国際情勢は変化しているわけです。国際法的には、現政権によって虐げられた者たちが蜂起することは、一つの権利、「民族自決権」（Selfdetermination）

です。これは基本的人権的な考え方の一つです。国際法上では、一応そういう行為は保護されています。武力を使うことも否定はされていません。勿論、それが国際紛争になると、捕虜を虐待してはいけないとか、戦争の流儀が決められ、国際法上の縛りを受けます。一応、国際法的にはこれはできます。「やれ！やれ！」とは言いませんが、やむを得ず蜂起し銃を取るということは、国際法上、悪いことではない。しかし問題は、誰かが彼らを「テロリスト」という言葉で言い始めたら、もうそこで終わりです。彼らは敵になります。誰が「テロリスト」と言うのか、それはアメリカです。アメリカが「テロリスト」という言葉を使えば、レッテルが貼られ、国際法で保護されている民族自決権のための闘争や運動でも殲滅される対象になります。チェ・ゲバラの暴力を、僕自身は絶対に行使しません。

でも否定はしません。ゲバラは、僕のヒーローですから。これが僕の立場です。僕は、全暴力を否定する立場ではありません。

3. シエラレオネ 貧困をなくせば戦争は止まるのか

3-1「ダイヤモンド」

もう一つの問題です。「貧困をなくせば戦争は止まる」。それを信じて活動したのが僕の30代です。30代の10年間、僕はアフリカで、家族と一緒に過ごしました。最初の4年間はシエラレオネ、後の6年間はケニアとエチオピア、3年ずつです。うちの（二人の）息子はアフリカで生まれ、アフリカで育ちました。貧困とは何かと考えると、やはり、先ほどからも話しております構造的な暴力を考えざるを得ません。世界や地球全体のレベルで、構造的暴力の被害者の底辺と言え、アフリカになってしまうと思います。それから、この貧困をつくる構造的な暴力をどうやってなくすか、なくせば平和構築につながるのか、というジレンマをこれからお話ししたいと思います。

是非この映画を観てください。『ブラッド・ダイヤモンド』。ディカプリオが非常に良い役柄で、南アフリカの傭兵会社の傭兵の役を演じております。「血ぬられたダイヤモンド」。この映画の舞台がシエラレオネという西アフリカの小さな国です。そこが僕にとっての最初のアフリカで、そこで息子が生まれ、そこで4年間過ごしました。1988年の話です。この映画は内戦が始まってからのことを描いておりますけれども、この映画の主張は「ダイヤモンドはどこから？」です。この映画の最後の場面はある国際会議の様子です。それがキンバリー・プロセスという、一つの取り決めがつけられた国際会議です。キンバリー・プロセスとは、どこで原石が採られたかという証明、つまり出生証明書がないダイヤは、原石もしくは研磨の後のプロセスの状態でも扱ってはいけないという宝石業界の自己規制です。その証明書をキンバリー・プロセス証書と言います。産出国が、キンバリー・プロセス証書を発行するわけです。その証書のないダイヤはどんなに有名なブランドのダイヤであっても、99%以上の確率で、原石の時に密輸されたダイヤです。キンバリー・プロセスを推し進める契機となったのが、シエラレオネです。シエラレオネは、世界で最も優良の質のダイヤモンドを産出する国です。

ダイヤモンドはどこから来るか、この国からきたものなのです。

シエラレオネの位置は、横がリベリア、上がギニア、その向こうがコートジボワール、この辺は名だたる紛争国地帯です。一つの国で紛争が起こると国連が動いて、国連平和維持軍が何とか火消しを行います。けれども、彼らは全部国境を超えて動きますから、隣の国でまた、傭兵化した戦闘兵が現れます。モグラたたきのような状況なのです。西アフリカは地域的に非常に不安定です。

シエラレオネのダイヤは、機械掘りする必要がないのです。地面を掘り返して、土を川辺に持ってきて、箆でシャカシャカすると出てくるわけです。ダイヤの密輸は大変に簡単です。まあ、飲み込んでしまえばいいわけです。飲み込んで旅客機に乗って、ヨーロッパについて空港のトイレで出せば、それで密輸完了になるわけです。誰でもできます。本当に、援助関係者も、国連関係者も含めて、誰もがやっていました。やっていない援助関係者はいませんでした。一個のダイヤモンドを密輸するだけで何千ドルもの利益になる。たった一個で、です。国際職員がお小遣い稼ぎの感覚です。国連職員を含め、国際協力をしている人間がするくらいですから、他の人はもっとやっている。僕はやりませんでした。信じてください。このようにダイヤがざくざく採れる国なのです。ダイヤだけではありません。鉱山資源にも恵まれております。金も採れます。レアストーン関係も採れます。それだけではなくてカメラとか時計のチタンの原料となるルータイルもザクザク採れます。多分、そうした地下資源が有効に管理され、国庫に入っていれば、この国はアジアで言うブルネイみたいな国になっていたでしょう。だいたい人口400万人から500万人の小さい国で、これだけ資源が採れるわけですから、アフリカで有数の富める国になっていると思います。ところが、この国は世界最貧国です。マネジメントが悪いからです。だから適正に使われ、管理されるべき地下資源が管理されていない。

国連開発計画（UNDP）が1975年から、いわゆる「人間の社会開発指標」（Human Development Index）を始めました。これは幼児の死亡率、識字率などいろんな指標を組み合わせて、国別のランキングを作ります。その発足当時の1975年からつい最近までシエラレオネは世界最貧国でした。貧しいアフリカの中でも最も貧しい国でした。

世界はそれを放っておくのか。そういうわけではありません。国際援助団体が

そこに行きます。僕もその一員でした。インドで国外退去になった後、「プラン・インターナショナル」というアメリカをベースにする国際NGOです。日本のNGOとは訳が違います。例えば「ケア・インターナショナル」、他にも「セーブ・ザ・チルドレン」、「ワールド・ヴィジョン」などがありますが、こういう団体は国連ユニセフあたりより、予算規模が大きいです。僕は日本人では初めて、これに雇われて現地の事務所長を務めました。

3-2「援助活動」

そこで何をしたかという、これです（写真4）。とにかく子供がバタバタ死ぬのです。静かに、静かに死んで行くのです。幼児の死亡率は世界で一番悪く、2位の追随を許さないほど悪い。とにかく栄養失調で死にます。いかに子供を殺さずにすませるか。「チャイルド・サバイバル」です。いかに子供を殺さないかという事業を展開します。それは、やはりお母さん方と深く関わってきます。1988年当時はWID（Women in Development）という言葉が花盛りでした。つまり開発には女性。男を相手

写真4

にしてはダメだと。男に小金を持たせると、お酒やたばこに消えてしまう。

この国の予算は驚くなかれ、日本円にすると年間90億円です。だから世界最貧国なのです。そのうちの60億円が債務返済、年間30億円で回っていた



のです。僕の活動の予算はその当時、7億円から10億円ありましたから、推して知るべきです。この国の3分の1は僕の領土みたいなものでした。政府がやるべきことを全部僕らがしていました。具体的に何をしたかという、道路を作り、学校を作りました。自慢話ではないですが、この国の小学校の3分の1は僕らが作りました。すべて僕らがしていました。診療所も病院も作りました。

「キラー・ディズィーズ」。アフリカには、キラー・ディズィーズというのがありました。一番かかるのがエイズ、二番目が多分マラリア、三番目が日本人でもよくかかる下痢です。

写真5

どうして下痢で死ぬのかというと、慢性的な栄養失調状態の乳幼児が下痢になると、脱水症状で簡単に死んでしまいます。下痢はどうやって媒介されるかという、汚物にたかったハエです。だから下痢を防ぐには汚物を処理しなくてはいけない(写真5)。



ところがアフリカでは農村に行くと、今は改善されたかも知れませんが、あまり便所で用を足すという習慣がないのです。広々とした所で用を足すのが一番気持ちいい用の足し方です。それはそうです。僕も何度もしました。どうして狭くて汚くて暗い所でしなければいけないのですか。子供なんか行きやしません。気持ちは分かるのですけれども、それをしている限りは下痢が蔓延してしまう。トイレを普及させるためには、共同トイレを作ればいいか。しかし、共同トイレというのは、日本でも汚いでしょう。やはりトイレ文化を根付かせるためには、共同トイレではダメなのです。各家庭に一個作らなければいけない。この国の3分の1が僕の領土みたいって感じましたのは、当時扱っていた世帯が10万世帯ぐらいありました。1年以内に10万個のトイレを作った。鼠算式にそれができる方法を考えます。現地の人間に道具の使い方を教えて、インセンティブを与える。そうすると、村の仲間たちとどんどん作っていきます。大規模なことを雑にするのがODAです。キメの細かいことを、ちまちまとするのが日本のNGOです。こういうキメの細かいことを大規模にするのが、欧米NGOです。

これは農業プロジェクトです(写真6)。やはり栄養をつけなければなりません。このマイクを持っているのが当時の副大統領です。若いころの僕はその右側にい

ます。この国で初めて、農協を作ったんですが、これはその開所式です。農協を作って何をするのか、機械化です。トラクターの導入です。そして猫の額のような個人の農地を集約化して、効率よく機械化し、それで収穫量がボンと上がります。

これが当時の大統領です（写真7）。ジョセフ・サイドゥ・モモさん。元軍人です。僕の友達でした。なぜ友達だったかという、僕の活動区が彼の出身地だったのです。それで僕はこの国の議員を1期務めました。それは大統領の任命でした。僕は権力の一部だったのです。日本では考えられないでしょう。アフリカは本当に良い意味でいい加減です。

僕は権力と癒着していたわけです。癒着と言ってもドロドロした関係ではなくて、ギブ・アンド・テイクです。つまり、日本でもそうでしょう。地方の議員というのは中央から新幹線を引っ張ってくる、高速道路をつくる、それで票を集める。シエラレオネには、それをやる財源がありませんので、国際協力のお金をどうやって引っ張ってくるのかになるわけです。そこで我々が働くことによって、大統領の名声があがるわけです。地位を確立して、尊敬も集めるわけです。それを我々は許す。そのExchange（引き替え）として僕は、大統領からいろんな便

写真6



写真7



宜を頂いた。例えば、大統領から感謝状をもらいます。お金をいただいた欧米の人たちにそれを見せると、大統領から感謝されているということで、もっと支援が集まる。

3-3 「マッチポンプ」

まとめです。シエラレオネは世界最貧国です。ところが豊富な地下資源がある。これに群がるのは、多国籍企業です。ダイヤモンドを買う人間はシエラレオネにはあまりいませんから、誰が買うのかといえば、個人的なバイヤーから、多国籍企業まで（外国人です）。さきほど言ったルータイルを機械掘りしていたのは、多国籍企業でした。

豊富な地下資源がありながら、どうして世界最貧国なのか。簡単な理由です。汚職です。つまり国庫に入るべきものが入らない。汚職が文化となると、つまり文化化すると競争になるのです。例えばA社とB社の賄賂合戦が始まるわけです。できるだけ有利な条件を引き出すべく、袖の下を持たせる。それで利益を被るのは、政府の高官と政治家だけなのです。彼らは国のことなんかどうだってかまいません。何故かというと、彼らの子供は皆、留学させて、欧米で暮らしていますから。だから汚職はどんどん進んでいく。最初はできるだけ少し有利な形で、資源を（国外に）持っていくぐらいの感じなのですけれども、どんどん進んでいくとすべて密輸ということになってしまうのです。

この国にも一応、鉱山の開発資源省みたいなものがあって、僕がこの国にいた1988年から1992年の4年半の間で、最初の予算年度、1988年から89年の政府発行のバランスシート（歳入表）の数字を見ると驚くことに、その二つの予算年度は歳入がゼロでした。でも、ダイヤモンドなどが密輸されているのは、肌で感じて分かっているわけです。隣人がしているのですからね。それでもゼロなのです。そのような状態です。

こうして国にお金が入ってこないと何が起こるか。当然、国家財政が破綻します。国家財政が破綻すると何が起こるかという、公共サービスが破綻します。学校が出来ていても、教師がいても、教師にお金が払われなければどうなるか。病院があっても、スタッフや医者に給料が払われなかったらどうなるか。ストップします。しかしストップしても患者は来る、子供もいる。そうすると、末端の

公共サービスを担っている看護婦や教師が何をするかというと、汚職です。この国はいわゆる義務教育と基礎医療は一応、無料と憲法に書いてあるのです。だから利用者からのお金は、学校でも徴収してはいけない。ところが、そうすると教師たちは、自分たちの給料が払われてないことを口実に、父兄からお金を取るようになるのです。それは医療でも同じです。これは賄賂ですね。これはしようがない、自分たちも食わなきゃいけない。だから正当性があるわけです。それで、上の方が汚職をすると下の方も汚職をするようになる。国全体が汚職をする。汚職をしない奴はいないという状況になる。〈汚職の文化化〉です。国が破綻します。子供がどんどん死にます。これが構造的なメカニズムです。

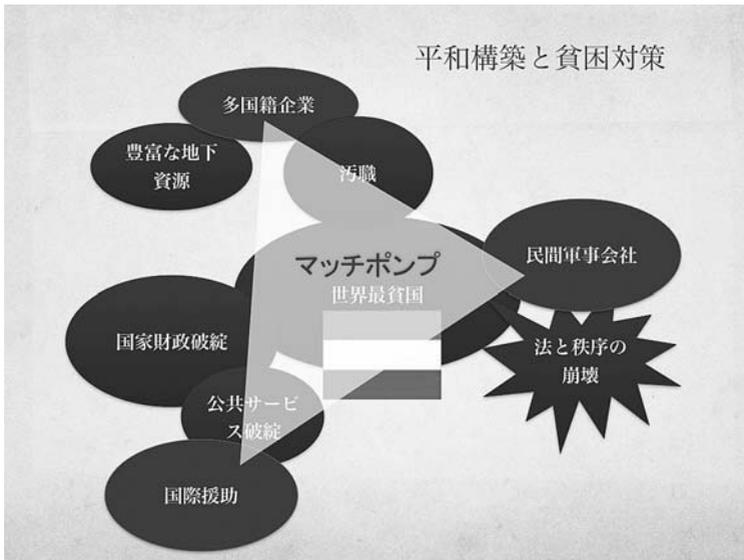
国際社会はそれを放っておくか。放っておきません。必ず国際援助をします。でも、この国が抱えている全ての問題を、我々は解決するのか。しません。部分的にしかやりません。何故でしょう、そこが皆さんに問題提起したいところなのです。人類が本気を出したらこの国は（買えます）。この国は年間予算、30億円で回っている国なのです。例えばそれが100億円にしたって、ビル・ゲイツだったらこの国を買えます。そういう発想はないでしょう。だから我々は本気を出してないのです。このアフリカが抱える大問題を一部の国連官僚、もしくは国際協力をしている我々に託しているだけなのです。それを我々が部分的に解決するだけでヒーローになり、自分たちが給料をもらえる業界を作っているわけです。日本の企業もやろうと思えば、この国ぐらい買えてしまいます。人類は本気を出してないだけなのです。くり返しますけれども、我々の援助というのでは、全ての問題は解決しないのです。部分的にしかしません。

話を続けます。破綻する公共サービスというのは、学校や医療だけではありません。多分、学校よりも医療よりも、語弊がありますけれども、重要なものがあります。それも破綻します。それは「法と秩序」です。法と秩序が維持されなかったら社会は成り立ちません。どういう事かということ、悪いことをしたら、その人たちは捕まって罰せられるという、最低限のことがないと社会は成り立ちません。でもその法と秩序を実行するのも公務員です。裁判官も、警察官も公務員です。彼らに給料が払われないとどうなるか。罪を犯しても罰せられない状況になるのです。それが始まってしまうと、一般犯罪が増えます。一般犯罪は金持ちが狙われます。腐敗した高官や政治家、もしくはNGOでお金を持っている我々、国連

職員がターゲットになり、僕も家族で暮らしていましたから、我が家もターゲットになりました。強盗、窃盗に何回か狙われました。警察に言ったとしても、給料が払われてないので、強盗に寝返るかもしれない。それで我々はどうすると思いますか。武装するのです。民間の警備会社で。セコムを完全武装したようなものだと考えてください。(まあ) そういうのは外国籍企業ですけれども。南アフリカに当時、多かったです。(映画中でも) そのこの傭兵役をディカプリオが演じています。僕らは安全をお金で買うのです。僕の家も完全武装の傭兵に守られていました。全てお金です。こうやって我々は、安全をお金で買いながら、国際援助を続けていくわけです。

平和構築と貧困対策 (について)。これはアフリカの一事例です。すべての貧困対策に、僕の経験がアプライするとは限りません。でも僕の経験は、地上で一番貧しい国での経験です。それも半端なことはしていません。権力と癒着して立派にやりました。ところがこの国は未だに、世界最貧国です。我々はこれを「マッチ・ポンプ」と呼びます (図1)。つまり自分で火を付けて、自分のポンプ、消防車を呼ぶというものです。シエラレオネの場合は、実は皆さんもマッチです。つ

図1



まりダイヤを無意識に買っているという点で。その無意識が戦争、紛争の原因になったのです。それで問題が起きれば、その一部を解決するため国際協力をやる。自分たちの身が危なくなれば、外国籍の民間警備会社を雇う。貧困対策に対して我々は、本気を全く出していません。企業はやりたい放題です。

3-4「革命と内戦」

そして遂に革命が起こりました。フォディ・サンコウという人物が率いるRUF (Revolutionary United Front革命統一戦線) が蜂起しました。「こんな腐った世の中ぶっ壊してやろう」という人たちが出てくるのは当然です。後でルワンダの話が出てきます。フツ族とツチ族が殺し合う、そういった話が多いですけど。シエラレオネの場合は、僕が断言します。これは「世代戦争」です。つまり旧態依然の年寄りによって腐敗した社会をゼロから作り直す。イスラム教徒であろうが、キリスト教徒であろうが、何族であろうが、若者たちが立ち上がった。特に大学生が多かったです。僕はそれを目撃しました。僕がいた3年目からこれが始まりました。どんどん大きくなりました。これは本当に革命だったのです。その国のインテリゲンチア、大学の教師なんかは自分が銃を取らなくても、心情的にサポートをしました。この映画(ブラッド・ダイヤモンド)では、革命統一戦線というのは、ダイヤの利益に目がくらんだ只の強盗集団で描かれています。それは間違いです。実は最後の方で実際にそうってしまったのですが。これは革命の疲弊という、もう一つの問題なのです。

この革命を、本当に、インテリゲンチアは皆、心情的に支援したのです。我々NGO業界もしようがないだろうと思いました。「どうしようもない政府」というのが、我々もやんわりと共通していた概念でしたから、政権転覆に半年や1年もかからないだろう、多分、短時間で革命統一戦線が革命を成功させるだろうというのが我々の予想でした。口にはしませんでしたけれど。でも、まさかこれが、この後9年、10年続くとは誰も思いませんでした。それがそうってしまったのです。ディカプリオの映画には、この辺の話が出てきます。革命の内戦化です。

この内戦で死んだ一般市民の数は、50万人だと言われています。内戦のスパンが長いので、それが単純に戦闘によるものなのか、戦争を原因とする飢餓によるものなのか、いろんな捉え方があるのですが、たった400万人の小さな国で、50

万人が死んだのです。すごい数です。

革命は、殺すべき人間を短期間に殺せば、後世の歴史は肯定的に見てくれるのかもしれませんが。ところが、内戦にすると、ただの殺し合いになってしまうのです。これを戦術的にみると、革命は絶対に短期間で終わらせなければならないという必然性が見えてきます。それは何故かという、革命をする人間というのは正規の部隊ではない。軍事作戦でも必ず考えなくてはならない事がある。攻めるだけではないのです。一番重要なのは、「兵站」です。兵站と言うのは、兵士にどうやって飯を食わせるか、弾薬を補給するか、です。兵站の計画を考えないと、軍事作戦はなりたたない。ところが、革命にはそういうのがないのです。とにかく怒りと情熱だけで盛り上がっていますから。それが長引くとどうなるか。農民たちに協力を申し出るようになります。「俺たちは、お前らを解放するために闘っているんだぞ、協力しろよ、米よこせ」と。世界最貧国の農民ですから、「嫌だよ、できないよ」と言う。「じゃあ、お前らは政府軍の人間だな」といって殺してしまうのです。そこから民衆の殺戮が始まったわけです。だから革命は、疲弊する前に、腹がすく前に決着をつけなければいけない。開放すべき人間を傷付け始めるのです。その時点ですでに目的が崩壊している。自らの生存のために、殺し続けることになるのです。幹部は志を持っているかもしれませんが。政治的な人間ですから。でもそれが末端の兵士にも伝わるかという、伝わらない。革命軍は正規の軍ではありませんから、当たり前なのですがけれども、チェーン・オブ・コマンドと言って、指揮系統がどんどんズタズタになっていくのです。

そして9年目です。1999年ですかね。開始から8年、9年経って、やっと国連安全保障理事会が重い腰を上げます。

3-5 「武装解除の現場」

僕はその後、他の国に赴任していましたが、国連から要請がありました。内戦が起こる前と内戦が起こった時の両方を知っている世界で数少ない人間の一人なので幹部として行くことになりました。僕が2000年に、約9年ぶりにこの地に降り立ったときには、この国は2つに分かれていました。つまり現政権がろうじて把握している首都近辺の領域と、その他の郊外から、首都の周りまでは反政府ゲリラが支配していたわけです。そこに我々は、完全武装した国連平和維持軍に

守られながら、入っていくのです。一応、首都には反政府ゲリラのスポークスマンがいます。それを相手にして、その地区の司令官に「伝言を送ってくれ、交渉に行くから」と言っただけ。ところが、そいつはOKと言っただけ、本当に伝わっているのか。内戦で疲弊して指揮、命令系統がズタズタになっている。現場と首都の人間とが全然、連絡が取れていないのです。でも我々にはそれしかない。武装してヘリコプターで降り

写真8

立って行くと、よく攻撃されます。ちなみにこのミッションは殉職率が一番高いのです、200名くらい亡くなっています。こうやって降り立って、リーダーや司令官が待っているところまでソロソロ歩いて行く（写真8）。



いつ撃たれるか分から

ないのですけど。そして交渉（ネゴ）をするわけです。もう完全勝利がないことは、敵も分かっているのです。内戦の最初の方は、体力があって皆勝てると思っている。ところが終盤になって疲れてくると、完全勝利（ノックアウト）はないと思いはじめ。そういう状態だと第三者が入っていきける。だから内戦が起こった当時は、誰も止められません。疲れて小康状態になって、完全勝利がなくなると、うっすらと分かり始める時期でないと我々は介入できない。その状況を待つのに9年間かかったわけです。50万人の犠牲の後で、やっとその時期が来て、我々が派遣されました。そしてネゴ（交渉）をする。何をネゴするかというと「停戦してほしい」と、「できるならば武装解除をしてほしい」、「武器を引き渡してほしい」と。そうすると「我々が裸になっちゃうじゃないか、復讐される」と嫌がるわけです。拒む相手に対して「心配するな、敵を上回る武力は国連軍として持っているから」と「絶対にそんな復讐はさせない」と。「じゃあ戦争犯罪で裁かれちゃうじゃないか」との心配があるわけです。「大丈夫、恩赦するから」と、とんでもないことを言うわけです。そればかりでなく、「連立政権を組めばポスト

を約束するから」と。「一般兵に関しては、ちゃんと職業訓練をして、社会に戻してあげるよ」と。そういう悪魔のような取引をするわけなのです。こうして説得に応じた部隊を、一つずつ武装解除します。

これはRUFのほうです（写真9）。ガキです、本当に生意気な。映画でも描かれていますけれど、7歳か8歳で部隊に入って、9年続けば16歳、17歳になっています。その間に家族との接触もなく、教育も無く、ただ女の子をレイプする、略奪する、人を殺す、それしかやっ

写真9

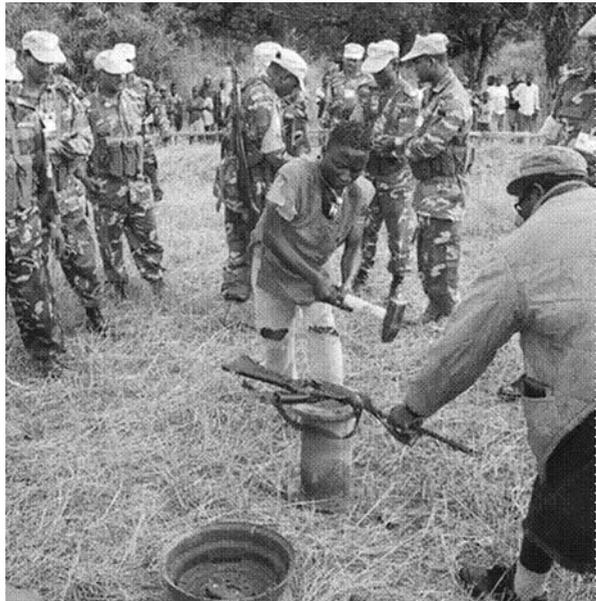


てこなかったモンスターですね。こういうのをどうするのか。それが大きな問題なのですけれども。

写真10

彼らが使っている自動小銃はカラシニコフAK47というソ連製の武器です。大変に丈夫な武器です。これを壊させます（写真10）。

話を端折りますけれど、2001年からですね、武装解除は。民兵を武装解除して、内戦が終わったわけです。そして武装解除の完了と共に当時の大統領が10年間続いた内戦終結を宣言しました。



内戦とはこのように簡単に収まるのかというと、そうではありません。全ての和平というものは、ある一つの状態を経ないと和平にはなりません。それは停戦です。停戦というのは、まだ戦争を諦めてはいないが、少し疲れたので1日ぐらい撃つのをやめようかという提案に応じることが停戦です。その停戦を1日から1週間、1か月、フォーエバーみたいに。それが平和、和平というものです。停戦がまず先です。まず「少し撃つのをやめてみない?」、慣れてきたら「少し机に着こうよ、話し合おう」と。初めのうちは武装しています。次のミーティングからは「ガードマンだけ外してくれない?」と。その次のミーティングから「腰にさしているピストルを外に置いて、席に着こうよ」と。こういう風にやっていくのです。最初からはできないので、少しずつやっていく。そうすると最後の方には完全に武装を解いて、交渉が始まります。こういう風に関係をつくっていくわけです。

3-6「正義と平和」

シエラレオネの場合は、トップ同士がした停戦の合意から始まっています。1999年のロメ合意。ロメというのは第三国の首都です。だいたい敵対する勢力の人間を第三国に連れていきます。これはトーゴという国の首都のロメで行われました。RUFの首謀者フォディ・サンコウと当時の大統領のカッパ（さん）です。この両者の間で停戦合意が調印されました。

この時に出された停戦の条件が世の中に知れた時、特に人権団体を中心として、「こんなのはあり得ない」と、皆が度肝を抜かされました。それがロメ合意でした。その一つが完全恩赦です。つまり全部赦してしまうわけです、戦争犯罪を行った人間、50万人殺した人間を戦争犯罪に問わないと。普通、一般兵に関しては、命令されたからやったという言い訳が成り立ちます。けれどそれを命令した人間、ましてトップを普通は許しません。でもこの場合は赦してしまったのです。赦すだけではなく、このトップを副大統領にするという究極のパワー・シェアリングを行いました。副大統領です。一政党として彼らを認めて、総選挙も関わらせてあげる。これはびっくりしました、国連の中にも人権委員会というものがあって、反対したわけです。こんなことをして、どうして人権という概念を世の中に維持できるのでしょうか。人権侵害で最もひどいのが戦争犯罪です。戦争犯罪を

赦してしまったらどうして世界の秩序が守られるのでしょうか。だから、こだわるのです。ユーゴ、ルワンダの戦争犯罪法廷を考えれば、戦争犯罪を赦さないというのが国際社会の考え方です。しかしこれを赦してしまったのです。合意というのは必ず第三者が必要で、それで第三国に連れていく。国連がそれをできたのか、いやできません。では誰が行ったのか、アメリカ合衆国です。当時のクリントン政権です、民主党は、ジェシー・ジャクソンという聖職者を前面に立てて、これをやったわけです。

米兵の血を一滴も流さず、お金もあまり使っていません。ただ、内戦の被害者の家族の心を蹂躪するというかたちで戦争犯罪を赦し、平和を得ました。究極の平和的解決です。それを仲介したのがアメリカ合衆国です。何故アメリカがこのような日本人も名前を知らない国に関与したのか、その歴史を少し理解するためには、ぜひもう一本、映画を観てください。スティーブン・スピルバーグ監督の『アミスタッド』という映画です。アメリカの黒人解放の歴史の上で「アミスタッド号事件」がありました。これはウィキペディアにも載っています。そのアミスタッド号事件を描いたのがスピルバーグの作品です。アミスタッド号というのは奴隸船です。当時、アメリカでもヨーロッパでも奴隸貿易が行われていた時には、奴隸狩りの拠点としてシエラレオネがあったところにスペインやポルトガルがやって来たわけです。その奴隸船の一つだったアミスタッド号で黒人奴隸の反乱が起こります。それがアメリカの軍艦に拿捕され、アメリカで裁判になります。その裁判の様子を描いたのがこの作品です。大変面白い作品です。こういうかたちでシエラレオネというのはアメリカと文化・歴史的に繋がっています。

ここで皆さんに言いたいのは、平和構築の際に平和と正義が両立するのかということ。何をもって正義と捉えるかは問題ですけれども、この場合の正義は、悪いことをした人間を裁くという当たり前の正義です。それと平和が両立するか。両立しません。平和のために正義を犠牲にする。また都合のいい時に、平和を乱さずに人権や正義を復活させるというのもあります。「人権、人権」と言っていたら停戦合意は結べません。最初から「裁くぞ」と言ったら、銃を置くと思いますか。無理です。意識的に人権や正義を、視野の外に置くことを和平の現場ではします。

3-7 教育で平和構築できるのか

シエラレオネで僕はこの国の3分の1の小学校を建設しました。何十万人もが僕たちの学校で勉強していたのですが、内戦が始まると、この子供たちの運命が大きく二つに分かれます。一つが、戦争の犠牲になって殺されることです。殺される方の子供たちは、悲惨な運命を迎えることになります。内戦が6年くらい過ぎてから、あの映画『ブラッド・ダイヤモンド』に描かれています。現場から奇妙な噂が聞かれるようになりました。どういうわけか、子供たち、大人を含めてですけど、生きたまま人間の手足が切られるということが行われるようになります。殺すのではなくて、生きたままです。殺さないで、生かしておくのです。ひどいです。もう一つの運命がこちらです、それを行った人間です。少年兵です。少年兵であっても子供というのは戦争の犠牲者と捉えます。悪いのは全部、大人です。しかし不都合な真実は、現場に存在します。それをお話したいと思います。

成人の兵士と子供の兵士とを比べると、その差は一目瞭然です。それは多分、武装解除などの現場で見た時、立ち話ですけども、彼らにインタビューをする機会のあった人間にしかわかりません。より戦場で残酷な事をしたのは子供兵士です。ゲーム感覚で彼らはやりました。つまり、より残酷さを競う。ゲーム化する。それを好んでやりました。成人の兵士はある程度の分別ができました。彼らが武装解除した子供兵は6千人いました。

その不都合な真実を説明します。子供は被害者か。我々が一番考えやすいシナリオは、『ブラッド・ダイヤモンド』という映画の主人公の子供の境遇に、それが表れています。まず反政府ゲリラが村々を襲う時に、必ず集中的にやる必要があります。それはお父さん、お母さんを子供の前で殺すことです。それを見ている子供は自暴自棄、ショック状態ですね。その状態の子供を拉致します。そして基地に連れて行って、そのために「捕獲」していた大人を連れて来て、子供に目隠しをさせて、自動小銃で殺させます。そして目隠しを解いて、「お前がやったのだぞ」と言って、殺人に対する垣根を取ります。それを初めに洗脳が始まります。麻薬を使うわけです。そうして子供が殺人ロボットに仕立て上げられるというのが、我々が考えやすいシナリオです。実際にそうしているのです、半分以上のケースがこれです。

ところが後の半分はそうではなく、自分から入っていった子もたくさんいるわ

けです。「お兄ちゃんたちがしているから」、「あのお兄ちゃんたちかっこいいし」といった具合に。つまり暴走族に入るような日本の子供たちと同じイメージです。「なんとなくかっこいいじゃん」、「他の大人たちもへいこらしているし」。つまり、自発的に入って行った子供もいます。子供の司令官もいました。これが更に厄介です。僕が武装解除した中で最年少の司令官、50人から100人の成人兵士を含めて指揮する立場の司令官に、14歳の司令官がいました。大人の兵士に殺せと命令した人間に子供がいるのです。これをどう考えればいいのか、分かりません。「でもやはり子供は犠牲者です」と考えるように、僕らは強制的に自分たちを説得し続けます。それは多分、今の日本の少年犯罪のジレンマと同じかもしれません。少年犯罪の年齢がどんどん下がっていますね。

教育で平和構築ができるか、分かりません。何故かという、3分の1が僕の領土だった所も、反政府ゲリラの攻撃に遭いました、僕のオフィスもやられました。凄かったです。この時、殺された方も殺した方も、僕の関わった子供たちです。人権教育は、アフリカでは当時、大変に珍しかったのですが、僕らはこのとき人権教育も行っていました。イギリスの出版社と共同して、副読本を作って、当時、出来るかぎりの最高の人権教育を施しました。しかし、見事に殺人口ボットに仕上がってしまいました。残念ながら、多分、暴力の魅力の方が平和教育よりも強いのでしょうか。でも、僕は、まだ平和教育を諦めていません。だから教職を続けています。

3-8 ホロコースト教育は平和構築できるのか

少し別の話をしましょうか。これもジレンマなのです。ホロコーストです。今、僕はアフリカの現場から離れていますが、現在の話です。東京外国語大学で教えている時に、僕は今の問題に日々直面しています。その訳は以下のようなことです。

特にアメリカですけれども、現在ホロコースト教育に関わる団体は、非常に大きくなっています。実際、1カ月に1回ぐらいは必ず、アメリカのシンクタンクや映画製作会社、あるいはホロコーストを中心に行っている教育財団や大学などからお誘いを受けます。つまり新しいドキュメンタリーを作ったから日本で上映するので講演会を開いて欲しい、コストは全部こちらが持ちますからと。彼らは金

持ちですから。とにかく日本の拠点を作ってくれと。こういうお誘いはアメリカやイスラエルからあります。あちらも、Webか何かで、僕の講座を検索してくるでしょう。大変残念ながら、私はすべて断っております。それは何故か。簡単な理由です。僕の学生、彼らは全員留学生ですが、半分以上はイスラム、ムスリムです。イスラム国家から来ているからです。ムスリムがホロコーストから受ける印象は、私たちが受ける印象と違うものがあります。日本人は動かされません。杉原千畝のような偉大な日本人もいたわけですから。アンネ・フランクの日記も我々の心にズシンと来る。でもムスリムにとっては違います。それは何故か。これはパレスチナのインティファダです。これは第一次インティファダの写真です。パレスチナ人のムスリムの子供が石でイスラエルの戦車に向かっていているところです。世界中のムスリムにとってパレスチナ問題は、全イスラムの共通の課題です。もしくはパレスチナ問題というのは、全世界のイスラム教徒を感情的に結び付ける共通の問題でもあります。きわめて象徴的な問題です。つまり、非合法的な占領を行っているイスラエルに対して、弱いパレスチナ人、同胞であるムスリムが闘っているわけです。しかも、素手で、です。僕の学生を含めて、この人たちムスリムは、ホロコースト教育を推し進めようとする人間を、イスラエルの戦車の後ろに見るわけです。だから彼らは、心を動かされるようなことには到底ならない。僕自身は大変に心を動かされますけど、学生たちからするとそうはならない。これで何を言いたいかと申しますと、全ての過去の悲劇というのは歴史に留めないといけない。当たり前です。それは何故かということ、同じような歴史を繰り返してはならないという思いがあるからです。だから映画をつくる、博物館をつくる、書籍をつくる。それは全ての歴史の記憶が、黙っていたら風化してしまいますから、それをすべて押し留めようと、記憶に残す作業になるわけです。これにはすべてお金が掛かる。つまり意地悪な言い方をすると、お金を掛けた歴史の記憶は残るのです。そうではない歴史や文化は忘れ去られる。ユダヤ・ロビーというのは凄いわけです。お金を持っています。だから、こういう歴史を残すことが出来ます。別に侮辱しているわけではありません。くり返しますけれども、僕自身は、ホロコースト教育は自分の心にズシンと来るタイプの人間ですから。お金を掛けられる歴史は残ります。なぜお金を掛けられるかということ、政治力があるからです。政治利用されない過去の記憶はないでしょう。そういう風

にムスリムは捉えるわけです。現在行われているイスラエルの攻撃性を見れば、つまり今は、イスラエルが加害者です。しかし過去にはホロコーストの被害者であったわけです。つまり現在の加害者性のイメージを薄めるために、過去の被害者性を喧伝しているという風に、ムスリムは見るわけです。だから、現在の政治の場で過去の記憶を政治利用していると考える。これは悲しい現実です。これをどのようにすればよいか、分かりません。ただ事実として、イスラム圏の人間を多く受け入れている間は、ホロコースト教育は僕の講座ではできません。それだけの話です。

4. 「概念の戦争の幕開け」

アメリカの9・11です。現在の全ての問題はここから始まりました。残念です。ブッシュがこのテロとの戦いを始めなければ、現代の戦争はもっと解決しやすいものになっていたと思います。新しいタイプの戦争が始まったから、我々は今このように苦勞をしているのです。戦争というのは国と国、もしくは連合国と連合国、そのガチンコの争いです。これまで、これが戦争と言われました。ところが現代のいわゆる、テロとの戦いというのは、概念との戦争です。テロリストと言うのは概念です。誰かがテロリストと言うだけで、つまり名前を付けるだけで、誰かが突然テロリストになる。僕だって今、こんな平和な話をいたしておりますが、明日テロリストにされるかもしれません。これは国と国の話じゃなくて、自分の家族、自分の子供の中にもテロリストが生まれるかもしれない。アメリカは自国に、その問題を抱えているわけです。概念の戦争を始めてしまった。そしてこの後、報復攻撃のために、アフガン戦争が始まるわけです。

アフガニスタンの戦争は今も進行しております。来年には、ある程度、撤退すると言っておりますけれども、これは完全撤退ではなくて、ただ疲れたから撤退するだけの話です。来年撤退したとしても13年間です。これは終わりではありません。まだ続いています。13年以上続いた戦争は、アメリカ建国史上ありません。南北戦争が約4年、第一次世界大戦が約2年、第二次世界大戦が4年半です。ベトナム戦争が13年くらいありますけれども、実質アメリカが関わったのは10年くらいです。くり返しますけれども、現在行っている戦争はアメリカ史上最長の戦争

です。こんな戦争をアメリカはやったことないのです。疲れるに決まっています。アフガン戦だけでアメリカ兵が3千人くらい亡くなっています。経済も疲弊しています。つまり政治的にも、経済的にも、心情的にも、もはやこの戦争は続けていられなくなった。だから来年、引くと言うわけですが、片が付いたから引くのではなくて、逃げ出すのです。第二のベトナムです。

こんな厄介な国と我々は一番、仲が良いのです。そんな彼らのおかげで、我々が守られているわけです。この事実をどう捉えるのか。国際政治的に見ても、アメリカの平和は日本の平和です。僕はヘゲモニーとしてのアメリカは大嫌いですが、日本の戦後の平和は、憲法9条のおかげもあるでしょうが、多分、アメリカのおかげです。アメリカが平和でないと困るのです。ところがアメリカが一番戦争をするのです。中国が脅威だと言いますが、アメリカほど人を殺していませんから。

このアフガン戦争と僕は関わることになります。小泉政権当時です。日本政府の代表として、アフガニスタンに派遣されました。タリバン政権崩壊後で、タリバンに勝ったと思っていた時期です。そこでタリバンに勝った勝者組の軍閥たちが、また内戦を始めたのです。その軍閥たちの武装解除をするという任務でした。その話をすると2時間くらいかかるので、今日はいたしません。

言いたいことは、アメリカの平和とどう付き合うかです。これも未だに分かりません。僕は立川の出身ですから、立川基地は返還になりましたけれども、かつては沖縄みたいでした。今、そこは昭和大公園になり、かつての米軍基地の記憶は全くありません。だから本土の人間、特に東京の人間は、僕自身を含め、アメリカの基地が返還され縮小している印象を持っていたのですけれども、近年、僕は沖縄に行くようになって、本当に考えが変わりました。やはり日本は、アメリカの軍事基地です。アメリカの基地と基地の間に、日本人が住んでいるという感じですが。沖縄の基地を見て軍事占領が未だに続いていると思います。その印象は僕だけではなくて、学生たちも同じように感じるようです。毎年、沖縄に僕の学生を連れて行きます。すると彼らはびっくりして、「なんだ、日本ってアメリカの基地じゃん」と言います。軍事占領されているように見えるのです。日本はそういう国なのです。そのぐらい沖縄の負担になっているのです。

この戦争は一応、2年前に一つの決着が付きました。それは同時多発テロの首

謀者であったアルカイダのウサマ・ビン・ラディンを殺したからです。一番の敵をやっつけたわけで、オバマさんは祝ったのです。でも彼が死んでも、アルカイダは死にません。逆に強くなっています。殉教者たちですから。問題はそこにはありません。問題なのは彼が殺された場所です。これはアフガニスタンではありません。パキスタンです。パキスタンは、日本と同じようなアメリカの同盟国です。そこで殺されたわけですが、しかもパキスタン政府の全く知らない所で。例えばこう考えてみてください。ウサマ・ビン・ラディンが東京新宿の歌舞伎町に潜伏していて、突然アメリカのヘリコプターが飛来して、特殊部隊が降りて来て、これを撃ち殺して、死体もろともかささらって行ったと。日本の政府、警察はどのような対応を取るでしょう。多分、日本は何も言わないでしょう。でもパキスタンは、そうじゃなかった。パキスタンは、反米意識をものすごく高めていました。どうしてそのようなことをするのか、たとえ悪いやつかもしれないが、主権侵害ではないかと。それで、その後ヒラリー・クリントンが次のように言いました。アメリカは世界のどこでも、アメリカへの脅威を見つけた場合には、それに対応する権利を有すると宣言したのです。つまり現代は、アメリカにとって全世界が戦場なのです。繰り返しますが、テロとの戦いが終わるまでは、全世界がアメリカの戦場なのです。戦場であれば、人権なんかいらぬ。殺してもいいのです。ウサマ・ビン・ラディンの人権はどこに行ったのでしょうか。テロとの戦いでは、人権など問題ではないのです。これはCIAの暗殺ではありません。CIAがやったのならまだ分かりますけれど、これはアメリカの特殊部隊が行った軍事作戦です。しかも軍の名の下に捕獲のためではなく、最初から殺すことが目的の軍事行動です。暗殺ではないのです。大統領は終わった後、「よくやった」と声明を出しました。スパイだったら声明はだしません。スパイは闇の仕事ですから。そこで名だたるアメリカの人権団体は誰も、ウサマ・ビン・ラディンの人権を言いませんでした。だからわれわれは、悪者、テロリストであれば、どんな手段を用いても、国際法の裏付けがなくても、殺しても良いのだと感情的に許しているわけです。麻原彰晃であろうと、どんな鬼畜であろうと、法の名の下に正当に裁かれるというのが法の下での平等です。でもテロリストだという言葉を使えば、法を超えてすべてが許されるわけです。つまり戦時であれば、何でもできるわけです。たとえ殺しても刑に問われずに済みますから。だからアメリカが、世界中が戦場だ

と言ってしまえば、何でもできるわけです。そういう世界に我々は突入しているわけです。

5. 武器がなくなればいいのか

ルワンダの話です。僕はこの国に行ったことがありません、1994年、ツチ族とフツ族の内戦が起きました。ルワンダの場合は凄まじいです。100日間に100万人が殺されました。100万人です、1日に1万人。僕はNHKの番組で、ロメオ・ダレールという国連平和維持軍の最高司令官と対談いたしました。彼は今、カナダの上院議員です。彼との対談番組に出て、僕はシエラレオネで同じような体験をしました。国連の立場に立つ彼は、ルワンダで100万人が殺される現場にしながら、何もできなかったという十字架を背負っているのです。この対談もNHK出版から『未来への提言』というタイトルで出版されています。このルワンダの悲劇から「保護する責任」ということが言われるようになりました。保護する責任 (Responsibility to protect) という概念があります。どういうことかという、以下のような話です。ルワンダのような国で内戦が起きます。主権とは、その国の政府が自国民を保護する責任を含んでいます。その保護する責任を放棄したり、虐殺に加担したりするような政府がある場合に、それを放っておけるのかという話です。内政不干渉という原則が、国連の一般的な考え方です。内政不干渉の原則を凌駕してまで、我々は介入する責任を有するのかという問題です。これはまだ決着が付いていません。ルワンダの場合は、保護責任 (=内政干渉) をとりませんでした。それで100万人が犠牲になった。ロメオ・ダレールは、内政干渉をすべきだと言いました。「保護する責任」を行うべきだと。ルワンダの場合は、大量破壊兵器は使っておりません。民衆が群衆を殺した時に一部使ったことがありましたけども、せいぜい自動小銃ぐらいです。他は、こん棒、ナタ、マシエティと呼ばれる長い刀で殺しました。しかも、地元のFMラジオのメディアをうまく使って民衆を扇動したのです。つまりツチ族はゴキブリだ、あいつらがいる限り、我々フツ族の繁栄はないという本能に訴えかけるわけです。そういうことを刷り込まれると、我々は殺すのです。だから刷り込みにFMラジオが効果的に使われました。

ここで皆さんに言いたいことは、武器を無くせばそれで良いのかということです。そうではありません。多分、大量破壊兵器を使っても、100日間で100万人はなかなか殺せません。広島と長崎の原爆の犠牲者数を足しても、そんな数にはなりません。しかも、それを引き起こすのは民衆です。一番怖いのは人間です。

6. スリランカ 「完全勝利と平和構築」

最後に日本の問題にも触れたいのですが、スリランカの話をしします。これにも関わりました。スリランカは日本の最大援助国の一つで、「真珠の涙」と呼ばれるインドの下にある国です。ここで1970年代から、少数民族のタミール人がマジョリティーのシンハラと呼ばれる仏教徒から、独立運動をずっと進めてきたのです。民族自決のためです。基本的人権である民族自決です。しかしシンハラ政府から見れば、彼らはテロリストです。このタミール・タイガーという組織が、少数のタミール人の王国をつくることを目指して、二十数年間闘争をして来ました。ちょうど数年前に、長く続いたこの闘争に片が付きました。僕はこの片が付く前に、何とか両者に和平が実現できないものかということで、密使として送られました。そしてタミール・チェルヴァンという人物に面会しました。彼は、タミールの虎(Liberation Tiger of Tamil Eelam)のナンバー2です。政治部のトップです。彼と対談をして、なんとか和平の道を探っていました。彼はこの2年後に戦死します。その後、どういうわけかシンハラ政府が、急に強くなりました。どうして強くなったかという、実は我々の知らない所で、中国が支援をしていたのです。それで片が付いてしまいました。彼を含めて、そのトップ、幹部全員を皆殺しにしました。市民も犠牲になりました。つまり政府側の完全勝利です。その結果、戦争は終わりました。今は、戦争がないという意味で平和です。つまり戦争による完全勝利で、平和をもたらしたわけです。しかし、勢いづいている現政権に対して、少しものを言いづらいという状況ではあります。言論統制が非常に厳しいと聞いています。でも一応は平和です。この完全勝利(Total victory)することによってもたらされる平和を、我々平和学の研究者はどう捉えるのでしょうか。これは大変難しい問題です。日本人にとってはもっと難しい。何故なら、日本人もコテンパンにたたきのめされて、今の平和を勝ち得た民族だからです。

日本人は、原爆を落としたアメリカ人に対して友好的です。アフガン人にこのことを聞くと、本当に奇妙に映るらしいです。なぜ敵を愛するのでしょうかと。そのことを、一部の人は、「我々はずっと洗脳され続けている」と言います。あるいは「日本人は、戦争そのものに対する憎しみを敵に対してではなく、自戒を込めて自分に転嫁させている成熟した民族だ」とも言います。これが成熟した民族なのか、僕には分かりません。でもこのTotal victoryによって勝てる戦争だったら、勝てば良いではないかと時々、思うこともあります。

7. 「セキュリティゼーション」

これで最後の最後です。原発事故に伴う反原発運動は、いったいどうなったのでしょうか。あれだけ日本で反原発の民衆運動が盛り上がったのですが、僕の友人には反原発の民衆運動をやっている者が多いです。

そして金正日が死んで、息子がミサイル発射など挑発行為をしてくれます。そして中国、台湾が絡む尖閣問題があります。もちろん日本が米軍の軍事基地である限り、第二次世界大戦のような戦争を、我々が主体となって仕掛けることは、あるとは思えません。そう信じたいです。けれども、今僕自身、ちょっと変な気を感じています、僕だけではないと思いますが、ヘイト・スピーチなども花盛りです。恥ずかしい限りです。右傾化を促進させようとする者にとって、外的な要因が少しずつ好都合に働きつつあります。僕らはどちらかという、リベラルとか護憲派に属すると言われる人間なので、逆に身内に対して注意を喚起しています。何故かという原発の問題ですね。つまり、我々はあれほどの脅威を味わったわけです。放射能は本当に怖いでしょう、我々は骨の髄まで恐怖に震えました。逃げた人もいます。反原発運動もこんなに盛んになりました。戦後であれだけ盛り上がったのは、全共闘以来でしょう。でも政治力にはならなかった。今はこの恐怖を味わった我々の民意を、上手く利用しようと思えば利用できる、利用しようとする奴にとっては都合のいい時期なのです。

それはどういうことかという、原発への恐怖に脅えている我々に対して、「もしあの原発が狙われたら」と誰かが言い始めたら、どうなると思いますか。中国や北朝鮮が狙わないわけがない。そうすると、その人間の思いどおりに動か

される危険性があります。仲の良い軍事専門家たちとよく話しをするのですけれど、福島原発事故はテロリストに良いヒントを与えたと思います。今までは原子炉施設にミサイルを撃つとか、旅客機をハイジャックしてそこに突っ込むとか、そういうことを想定していましたが、違うのです。たとえば、中に潜入して、電源を切ってしまうればそれで良いわけです。それを証明したわけです。やろうと思えば、実に簡単なのです。その恐怖を誰かが言い出したらどうなるか。予算を投入して自衛隊をどんどん増強していくことに反対する民意は弱くなるでしょう。恐怖を味わった後だからこそ、国防に対する渴望というものが増してくるでしょう。今や、我々は、かなり脆弱な精神状態になっています。だからと言って、反原発運動に反対するわけではありません。僕はどちらかといえば、反原発の立場の人間ですから。僕の周りの人間も、脱原発運動をしている人たちです。私もそのサークルに入っていますから、僕は彼らに警鐘を鳴らしてきました。それに対してどうしたらいいか、というアイデアはまだありませんけれど、現在、煽動されやすい状態にあることを知り、気を付けるべきじゃないかという考えを述べ伝えていきます。それがセキュリタイゼーション（Securitization）、これは国際関係論の中のコペンハーゲン学派が唱えた概念です。日本ではこれを「安全保障化」と訳していますが、そうではないのです。セキュリタイゼーションとは、つまり未来に起こり得る危機とか、仮想敵国を顕在化させることによって、今までの方法ではだめなのだ、今までのやり方を踏襲しているだけでは防ぎきれないのだと世論を操作して、それを民意にして政治化する。そういう一連の行為がセキュリタイゼーションです。これは悪いことだけではないのです。つまり予防と言うのは、全てセキュリタイゼーションです。災害予防も防災も。これは人類の知恵なのです。でも行き過ぎると、戦争まで行ってしまう。だから、そのメカニズムを読み解くことが、セキュリタイゼーションの役割です。これが今、日本に一番必要ではないかと考えています。その訳を考えていますが、なかなか適訳が見つかりません。英語で活動している人間には、セキュリタイゼーションとはしっくりくる言葉なのですが、この考え方を定着させることが紛争予防に繋がると思います。というわけで長くなりましたけれども、以上で本日の特別講義を終えます。

【編集者解説】

伊勢崎先生の「特別講義」に先だって、〈司会進行〉係（山崎和明）からの発言と〈講師紹介〉（大峯和正）、そして山崎の〈開会挨拶〉があった。そして伊勢崎先生の講演終了後に、山崎の〈閉会謝辞〉をもって終了した。本講演を再現するために、講演会に至る経緯や講演会の模様など、本稿の背景をも記録に残すべく文章化し収録した。

司会進行（山崎和明）

伊勢崎先生の特別講義にご来聴下さいまして有り難うございます。早めに来ていただいた方は、伊勢崎先生のトランペットの音が聞こえてきたと思います。伊勢崎先生には、隣室で気兼ねなく練習していただきました。私は幸いにも練習風景まで拝見いたしました。今日は、私が担当しております「平和学メジャー」の主催でご講演をお願いしたのではなく、「文化学会」主催で伊勢崎先生にお出で頂いております。

続きまして、伊勢崎先生のプロフィールについて紹介いたします。既に伊勢崎先生のご著書を読み、重々承知の方もおられることと思います。今回、伊勢崎先生にお出で頂いた理由とも関わっておりますが、平和学メジャーを専攻している大峯という学生が、伊勢崎先生の平和思想について勉強し、卒論を書いておりますので、彼から伊勢崎先生のプロフィールについて、報告いたします。

講師紹介（大峯和正）

伊勢崎先生の特別講義は間もなく始まりますが、その前に私の方から伊勢崎先生のプロフィールについて説明させていただきます。先ほど紹介に預かりました、前座をつとめます、平和学メジャーの大峯和正と申します。よろしく願いいたします。

伊勢崎賢治先生は1957年、東京都立川市の生まれで、大学時代は早稲田大学、大学院を通じて建築について学ばれました。しかし、建築が社会に与える影響力に疑問を持たれ、もっと人の役に立つようなことをしたいという思いからインドに留学されます。当初インドでは、国立ボンベイ大学大学院でソーシャル・ワークを勉強され、フィールドワークの授業で実際にスラムの人々と接していくなかで、社会運動家の方々との出会いが転機となり、大学院で学ぶ学問としての住民運動に限界を感じられ、大学院を退学されます。

その後、当時世界最大級のスラムに入り込み、NGOの職員として給料を貰いながらスラムの人々と共に生活を送られました。そして、そのなかでイスラム教とヒンズー教という宗教も異な

るスラムの住民たち約40万人を束ね、市当局による強制撤去への抗議やインフラの整備を求めるといった住民運動を指揮されました。伊勢崎先生はインド政府から国外退去を命じられるまでの約4年間インドで活動をされました。このインドでの活動から、その後の国際活動でも生かされる説得術や交渉術の基礎を学ばれたと著書で振り返っておられます。

帰国されてからは、英国に本部を置く世界的なNGO団体、プラン・インターナショナルの職員となり、200人以上のスタッフを指揮してシエラレオネ、エチオピア、ケニアで総合開発援助に尽力されました。具体的な活動内容は、主に農村部で診療所や学校を建て、農協をつくることでした。

しかし国際NGOでの職務に従事するなかで、権力を握ることの恐怖に苛まれ、NGOを退職されます。管理職として組織の運営のために、スタッフのリストラを簡単に行うようになっていた自分自身を顧みられてのことでした。その後、財団法人笹川平和財団というシンクタンクに転職され、そこで研究員として研究をなさっていました。そうしたなか、1999年10月に外務省国連政策課からの誘いを受け、国連職員とされます。それまでの国際NGOでの実績を高く評価されていたことでした。

そして、2000年～2001年にかけては、国連統治下の東ティモールに国連職員として赴任されます。13ある県のうち、インドネシアと国境を接するコバリマという県の知事を務められました。県知事として、1500名の国連平和維持軍、45名の国連文民警察、22名の国連軍事監視団、50名の国連民政官ならびに事務官を指揮して、県の治安維持やインフラの復興などを行いました。また、侵略に対する国民の不安から東ティモールに国防軍が創設されたことで失敗に終わりましたが、伊勢崎先生は東ティモールを「21世紀最初の非武装国家」にする構想を持っておられました。

さらに2001年から2002年にも国連の特別顧問としてシエラレオネに派遣されます。国際NGO時代に退去されて以来約10年ぶりのシエラレオネへの赴任となりました。内戦後のシエラレオネにおいて、紛争の再発防止と民主主義国家の建設を目的として、兵士やゲリラの武装解除事業を指揮されました。この事業により約5万人の兵士やゲリラが武器を捨て（武装解除）、兵隊としての職を解かれました（動員解除）。伊勢崎先生は事業の終了を見届け、国連を退職されて、2002年から立教大学大学院の教授に就任されました。

しかし、すぐに転機が訪れまして、まず、国際協力銀行から依頼を受けます。その内容は、アフガニスタンの調査をしたうえで、「紛争と開発」というテーマで日本のODA(政府開発援助)に政策提言をせよというものでした。伊勢崎先生は、現地調査のためにアフガニスタンを訪れ、現地の状況を目の当たりにされました。そして、その後2003年に日本政府からの要請を受け、日

本政府外務省の特別顧問としてアフガニスタンに赴任されます。タリバン政権崩壊後のカルザイ政権のアフガニスタンで、新しい国づくりのために日本は武装解除事業を担当することになったのですが、その任務を伊勢崎先生は一人で担われました。世界初の国際軍事監視団を結成し、非武装で軍閥や武装勢力と交渉を重ね、アフガニスタン北部で大きな勢力を誇っていた「北部同盟」という軍閥のDDR(武装解除事業)を成功に導かれました。伊勢崎先生はこの成功を日本の憲法9条による軍事的中立性がアフガニスタンから信頼された成果だと分析しておられます。

アフガニスタンでの任務を終えられた伊勢崎先生は、2006年から東京外国語大学大学院の教授に就任されます。大学では長年の国際舞台での経験から平和構築学、戦争予防学を担当されています。現在、様々な国からの留学生とともに戦争の原因は何なのか？どうすれば戦争や紛争が起こるのを防げるのか？といった問題に取り組んで研究をされています。また、トランペットを趣味とされていて、ジャズライブとトークを組み合わせたイベントなども催されているそうです。

伊勢崎先生は憲法9条と自衛隊の問題や日本の外交論について数多くの論文を発表されていますが、それらの論文から、私は伊勢崎先生の思想が決して理想主義ではない現実主義的平和思想だと考えています。例えば憲法9条の問題を取り上げてみても、これは私見になりますが、理念的な護憲論を唱えるのではなく、伊勢崎先生は憲法9条の利用価値に注目した護憲論を主張されていると推察します。私の報告はこれで終わります。

開講挨拶（山崎和明）

今話しました大峯の「まとめ」の私見が正しいかどうかは、伊勢崎先生のお話を伺って判断していただければと願います。また疑問がありましたら、後の質疑応答の時間をお願いします。

学術的なことは今、大峯が語ってくれましたので、私は非学術的なところで伊勢崎先生の紹介をさせていただきます。伊勢崎先生には、「平和はつくれるか」と題して御講義いただきますが、聖書には、イエス・キリストが「平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神と呼ばれる」と祝福しております。「平和を実現する人々」というのは、「平和をつくり出す人」とか「平和をつくるもの」とか、「ピースメーカー」、あるいは「平和のために働くもの」とも訳されております。まさに伊勢崎先生は体を張って、つまり命がけで剣を打ち直し鋤とし、槍を打ち直し鎌となす如く、シエラレオネあるいはアフガニスタンで武装解除をなさって来られました。私は、この伊勢崎先生もイエスの兄弟、神の子どもの一人と呼ばれるにふさわしい人物だと思っております。

私は、平和学メジャーの担当教員でもあります。文化学会の論集の編集、出版主事でもありますので、臆面もなく、「先生の平和思想について研究したい学生がおりますので、どうか先生、

玉稿だけでも頂けませんか」とお願いしましたところ、あまたより引っぱりだこでご多忙であるにも拘わらず、「学生のために四国まで行っても良い」と仰ってくださいました。また「たとえ10人の学生であっても、木の下でゼミナールを開いても良い」とも仰ってくださいました。本日は、平和をつくろうと志す者がここに30名ばかり集いました。学生たちの恩恵を受けて、一般聴講者も参加しております。伊勢崎先生の平和思想と、伊勢崎先生の人物そのものに直接、触れて頂ければと願ってやみません。長々と話してしまいましたけれども、先生にはこれから、このタイトルでお話しいただけますので、どうかご清聴くださいますようお願いいたします。それでは先生、よろしく申し上げます。

閉講謝辞（山崎和明）

伊勢崎先生、ありがとうございました。予定時間がオーバーしておりますので、先生には次の夕食会に向かっていただきます。今、どうしてもという御質問以外は、次の会食の席でお願いいたします。

今回は、先生にはインドおよびシエラレオネ、そして最後にはスリランカの具体的事例を教えてくださいました。貧困対策や教育が本当に平和構築に役立つのかという疑問、あるいは、正義や人権と言った普遍的価値が平和構築と両立するのかといった問題、さらには武器がなくなれば戦争がなくなるのかといった根源的な問題をも含めまして、まさにジレンマというべき事柄が、先生から我々に提示されたと思います。先生は、自分には答えはありませんと仰っておられますので、共にひざを突き合わせて、知恵を出し合う中で、平和を構築していかねばならないのだと思います。しかし、その際、つくづく思いますことは、聖書の言葉を借りますとく鳩のように柔和に、蛇のように聡くあらねばならぬということです。時間も押しておりますので、次のプログラムに移りたく思います。本日はどうも有り難うございました。